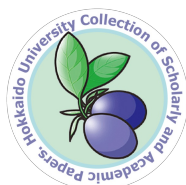




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	開催Report リカレントサミットin 札幌～地域共創型プログラムの実践と展望
Author(s)	北海道大学大学院教育推進機構リカレント教育推進部; Advancement of Recurrent Education Division, Institute for the Advancement of Graduate Education, Hokkaido University
Description	北海道大学大学院教育推進機構リカレント教育推進部が2026年1月28日に行った「リカレントサミットin 札幌～地域共創型プログラムの実践と展望」で作成したグラフィックレコーディング。
Issue Date	2026-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99179
Type	report
File Information	2025_RecurrentEducation_SummitReport_2.pdf



開催Report

リカレントサミット in 札幌 地域共創型プログラムの実践と展望

2026.1.28(水) 9:30～17:00

リカレントサミット in 札幌

地域共創型プログラムの実践と展望

●日時●

2026年 1月28日(水) 9:30-17:00

●主催●

北海道大学 大学院教育推進機構 リカレント教育推進部
しまなみ未来社会人材育成プラットフォーム

●共催●

愛媛大学 地域協働推進機構
広島大学 地域連携部

●協力●

北海道大学 広報・
社会連携本部 社会連携部門



Recurrent
Education
Programs
in
Hokkaido
University



1. ワークショップ実施概要
2. セッション1のグラフィック
3. セッション2の様子及びグラフィック
4. セッション3ワークショップの様子・ポイント・次の一手
5. ワークショップ内の対話/グラフィック
6. 参考/打ち合わせ記録

1. ワークショップ実施概要

ワークショップ実施概要 -2026年1月16日更新

https://reh.grad.hokudai.ac.jp/news/2128?fbclid=IwY2xjawPNh6pleHRuA2FlbQlzMABicmlkETE2dW9WZG9aT2ZYyYkV/DQ3huc3J0YwZhcHBfaWQQMjlyMDM5MTc4ODlwMDg5MgABHvR97BVyw-lsB20ji0qPHEmV0CsbLg30eFG0fVNO9Ft4US0AKW1VvNtTWa_aem_pah9HxxngP6TX7KW951qhA

●企画の背景/現状/課題感

・全国各地の大学で地域共創型のプログラムが進められつつありますが、これまで各大学の課題や先進的な事例を全国的な視点で共有する機会は十分でなかった。

●WS参加者

- ・定員30名
- ・各大学実務担当者
- 1部 44名
- 2部 47名
- 3部 37名(うち5名愛媛大事務方サポート)
- 5.6名1グループ×6
- ドタ参いる可能性あり
- ・北大、北海商科、小樽商科大秋田、岩手、帝京、岡山県立、広島、島根、鳥取、愛媛、熊本、金沢
- リカレント関係部署の部長、地域連携業務セクションのトップの方(組織を動かしている実務者、運営している教員の方、事務方)
- ・民間(道新アクセス Costep1期生1名)、個人で人材育成ファシリ(関係性ある方1名)、民間の社会人教育(芸大知人)、札幌の方
- ・リカレントが何か、国公立大の置かれている状況を知っている人の方が多いが実状知らない人も可能性
- ・取り組みの幅が広い、違いがある →現在地の共有をしっかりやる必要がある

●その先のめざす姿(仮)

○共創による価値の具体化

築いた関係性を土台として、新しいモデルの構築やプログラムの協働開発へとつなげる。

○連携の相談が生まれる

○自主的に次回のリカレントサミットが開催される

○共通ビジョンの確立

どんな切り口でより残したい？
「違い(都市と地方、事業、育てる人材像、習得するスキル)」「共通点(〃)」「学術的視点(大学だからこそのやる意味?)」「ステークホルダーとの関わり」「温度感」「ステークホルダーの考え」

●WSのめざす姿(仮)

アウトカム (目的/目標)/今年度を通じてどのような状態になってほしいか

自分たちで脳みそ汗かいて動き出す、リカレントに関わる一員として体現し合う温度感の中で、

①各プログラムの現在地とご自身の取り組み状況の共有

「個人」の立場から各プログラムの進捗や現状(困りごと・やりたいこと)を深く共有し、多様なリカレントの生態系の輪郭が見える

②リカレント教育の「生態系」やその中で大切にしている「方向性」の抽出

議論を通じて、互いの活動が向かっている方向の観点や、共通点を見つけ出し、連携の足がかりを作る。

③今後の活動に向けた具体的なヒントの獲得

報告だけで終わらず、今後の活動の「見通し」や「アイデアの種」を持ち帰る。

④実務担当者間のネットワーク構築

現場の課題や悩みを共有できる関係性を築き、結論はまだ見えないが、この場にいる人となら結論だせそうだと感じるネットワークを構築する。

リカレントサミット in 札幌:地域共創型プログラムの実践と展望 セッション 3

日時:2026年1月28日(水) 9時30分～17時00分 /運営チーム集合時間 8:00

○オープニング 議論・対話の入り口に意識を合わせる(小グループごとに着席)

14:15

15分

- ・はじまりのご挨拶、趣旨説明、今日の流れ、呼びかけ(種村さん)
- ・グランドルール、グラフィックの見方のおさそい (群盲像の共有)(反中)

○セッション1-発散:地域共創型プログラムの現在地 グループ (5,6人/6G)

14:30

60分+休憩15分

- ・自己紹介:所属名前、どんな期待できましたか
- ・グループ対話 35分
- 【問】お互いのプログラムと大学、地域の現在地を聞きあう
- ・今どんな活動をしていますか?どんなことを目指していますか?
- ・地域において、あなたの組織やステークホルダーは、プログラムでどのような役割を担おうとしていますか?
- ・「足踏みしていること」「困りごと」はありますか? 具体的にどんな場面でそう感じますか?

・全体共有(全体に共有したくなったことはなんですか?)1グループ 3分×6 20分

- ・ギャラリーウォーク(グラフィックを眺めながら自由に歩く時間) 休憩 15分

○セッション2-収束:私たちはどこへ向かう?

15:45

55分

- ・説明
- ・小グループで書き込みながら気づきを深める(ミニ対話) 20分
- ・全体共有(ボリュームが多い点、大学だからできること) 15分

全体対話:私たちの地域リカレントができること・めざすこと 20分

○クロージング -

16:40

5分

- ・ここまでのラップアップ 3分

【問】このネットワークだからこそできそうな次の一手を考える 「この仲間とさらに話したいこと」付箋記載

2. セッション1のグラフィック

セッション 1: 事例報告「地方先進プログラムの展開」

本セッションでは、北海道大学、金沢大学、熊本大学、愛媛大学の 4 大学より、各校が推進する「地方先進プログラム」についての事例報告が行われた。各大学からは、プログラム導入の背景や目的、具体的な取り組み方針および現在の実施内容が詳しく紹介された。

開会挨拶



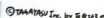
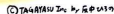
全体進行:種村剛
北海道大学リカレント教育推進部特任教授



開会の挨拶:山本文彦北海道大学理事・副学長



開会の挨拶:杉森正敏愛媛大学理事・副学長



セッション1の様子





- 共通: Q. 受講者層に偏りなど、いわばやっている方のみやっている傾向が合ったりすることはないでしょうか。受講者層の特徴などがあればご教示いただきたいと思います。(北大 鄭漢模)

④ 愛媛大学



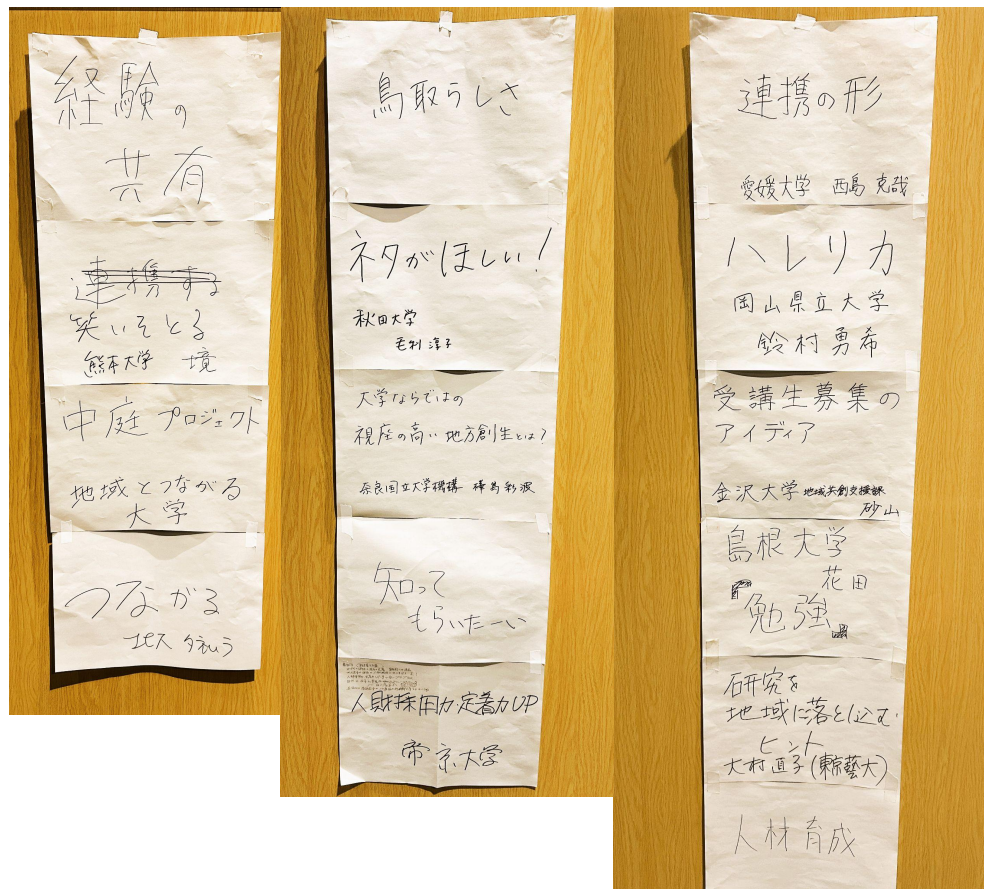
- Q.ハブ人材、トライセクター人材の要件は？

3. セッション2の様子及びグラフィック

セッション 2: 事例報告「道内のリカレント教育・地域連携の状況」

本セッションでは、北海道内におけるリカレント教育の最新動向と地域連携の具体的事例が報告された。

セッション2 ライトニングトーク(参加全組織からの一言活動紹介)の様子



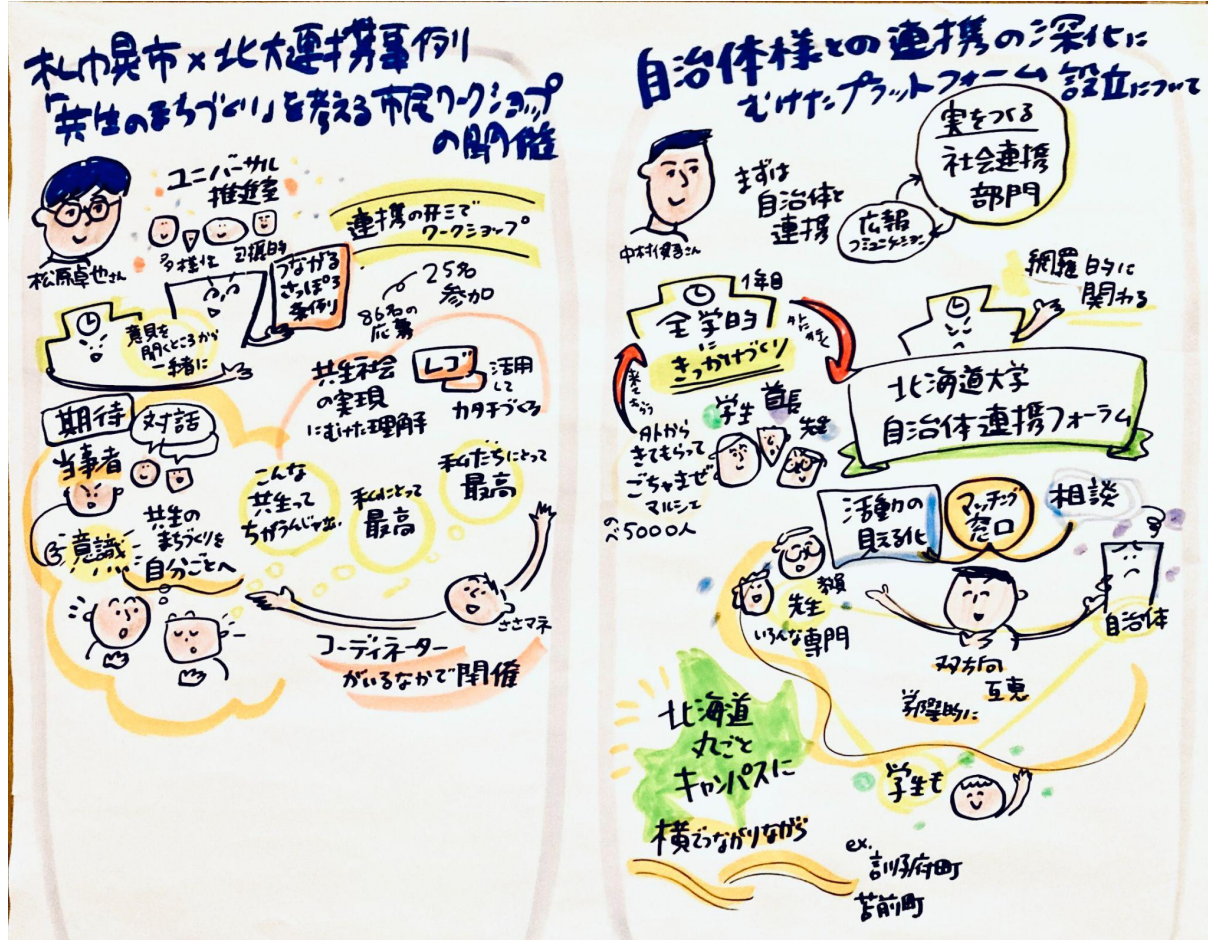
セッション2の様子



セッション2 グラフィック

札幌市×北大連携事例ー
「共生のまちづくり」を考える市民ワークショップの開催
松原卓也(札幌市 まちづくり政策局 ユニバーサル推進室 推進担当課長)

自治体様との連携の深化に向けたプラットフォームの設立について
中村健吾(北海道大学 広報・社会連携本部 社会連携部門 特任准教授)



セッション2 グラフィック

ユニバーサル・ユニバーシティ構想と Humanior—
”両利き”のリカレント教育に向けて
泉貴嗣(北海道国立大学機構 小樽商科大学大学院
商学研究科 准教授)



学生と地域が共に成長する大学モデルを考える
一川喜田二郎「移動大学」から今日の大学まで
鄭漢模(北海道大学 高等教育推進機構 講師)



データで見る北海道の医療 AIリカレント教育
: 医療AI開発者養成プログラム (CLAP) 受講状況
唐明輝(北海道大学 大学院医学研究院 特任講師)



4. セッション3ワークショップの様子・ポイント・次の一手

セッション 3: ワークショップ「地域共創型プログラムの現在地と展望」

本セッションでは、地域共創型プログラムの現在地をテーマに、参加者による活発な意見交換が行われた。各大学・組織が直面している課題や、日々の活動で抱く「問い」、そして根底で大切にしている価値観を共有することで、互いの活動に対する新たな気づきや具体的なヒントを見出す機会となった。議論を通じて、改めて「地域リカレント」としての豊かな可能性をつむぎ出しはじめるとともに、組織の垣根を越えた参加者間での具体的な「次の一手」を収穫した。

セッション3 グループ対話の様子



ワークショップのポイント(全体共有・全体対話)

<大学組織内の仕組みづくり>

- ・組織内、他の教員の巻き込みに課題がある。リカレントの本質、ビジョンが組織内で伝わっていないのではないか？
- ・そもそも、大学の教育に「社会貢献」が加わったことを教員が理解していない。
- ・組織としてリカレントにどのくらい重きを置くか
- ・採用時にズレをなくすために「リカレントをやります」と主張する必要
- ・学内人事をリサーチャー、レクチャーと整理して評価できるようにする必要
- ・大学職員が「コーディネートも当たり前だね」と思える状態にしたい

<リカレントの定義・意義>

- ・リカレントは、社会を更新していく装置になる！！
- ・マインドチェンジの担い手になれるのは大学
- ・新たな技術ができてきたから、社会とつなげられる、接着できるのがリカレント
- ・リカレントと地域創生を切り分けるのか、整理が必要
- ・大学は世の中の再設計士としてリカレントに取り組むことは生き残るチャンス
- ・人類の生存がかかっている。新しい価値を共有することがリカレントでできたらいいな



<地域リカレントとしてのビジョンづくり(目指す姿)>

- ・何のためのリカレントなのか言葉にできることが必要
- ・個人と企業と社会の視点が一緒になるリカレントができると思う
- ・リカレント教育はどこに寄り添うのか？
- ・人材育成によって、40代50代がもっと動けるように変えていける

<外に向けた発信・社会的な認知>

- ・リカレントの地位向上し、自走していくためにはリカレントの単語や意義を多くの人が知らないといけない
- ・情報発信が必要だが、どういう手段で伝えるか？
- ・リカレント教育を受ける側の理解が広がる必要

<ステークホルダーとの連携・実装ネットワークの構築>

- ・都市部と地方地域間の民間出身コーディネーターのネットワークをつくる
- ・ネットワークを通じてローカルとローカルの越境を増やしていく動きをみなさんと作りたい！

ワークショップ結果概要

大学組織内の仕組みづくり

- ・組織内、他の教員の巻き込みに課題がある。リカレントの本質、ビジョンが組織内で伝わっていないのではないか？
- ・そもそも、大学の教育に「社会貢献」が加わったことを教員が理解していない。
- ・組織としてリカレントにどのくらい重きを置くか
- ・採用時にズレをなくすために「リカレントをやります」と主張する必要
- ・人事でリサーチャーとレクチャーに整理して雇用・評価できるようにする必要
- ・大学職員が「コーディネートも当たり前だね」と思える状態にしたい

リカレントの定義・意義

- ・リカレントは、社会を更新していく装置になる！！
- ・マインドチェンジの担い手になれるのは大学
- ・新たな技術ができてきたから、社会とつなげられる、接着できるのがリカレント
- ・リカレントと地域創生を切り分けるのか、整理が必要
- ・大学は世の中の再設計士としてリカレントに取り組みことは生き残るチャンス
- ・人類の生存がかかっている。新しい価値を共有することがリカレントでできたら



地域リカレントとしてのビジョン（目指す姿）

- ・何のためのリカレントなのか言葉にできることが必要
- ・個人と企業と社会の視点が一緒になるリカレントができると思う
- ・リカレント教育はどこに寄り添うのか？
- ・人材育成によって、40代50代がもっと動けるように変えていく

ステークホルダーとの連携・実装ネットワークの構築

- ・都市部と地方地域間の民間出身コーディネーターのネットワークをつくる
- ・ネットワークを通じてローカルとローカルの越境を増やしていく動きをみなさんと作りたい！

外に向けた発信・社会的な認知

- ・リカレントの地位向上し、自走していくためにはリカレントの単語や意義を多くの人が知らないといけない
- ・情報発信が必要だが、どういう手段で伝えるか？
- ・リカレント教育を受ける側の理解が広がる必要

次の一手



組織内への働きかけ

- 学内関係者間でも今日のようなワークショップ
- 身近な人からの意識改革
- 組織改革で新しい受け入れ体制:ア・UA・UEA(教職でもない企画できる人材)イ.自分の所属・部内を組織、ウ.研究+リカレントの中間のプロジェクト。地域中核プロジェクト。NEWリカレント+・・・

社会への働きかけ

- 地域、業種を問わずリカレント教育を受ける風土を作るための経営層、組織のトップに対するリカレント教育
- 民間事業者とのディープな連携
- 地域と人(企業)をよく理解し、それぞれの立場の役割りを考える
- 企業・自治体内でリカレントおすすめる人大事。向いている、向いていない人も見分けて、リカレントをお勧めする役割をみんなで考えたい

ネットワーク・コミュニティの構築と持続

- 次、どこかあったかいところでリカレントサミット第2回を！
- 継続学習、探究するオンラインコミュニティ
- 常時リカレントが横につながる仕組みが欲しいです！
- 実践を通してつながる仕組み
- 日本のリカレント応援団？プレーヤー？伴走者？になる！
- リカレント教育に関する各大学の取り組みを学ぶ場(今回のサミットのような)の持続的な景況
- さまざまな視点での交流(研究者、行政、民間・・・)コーディネーターコミュニティ
- つながりを生かして全国にリカレントの意義を共有する(展開する)
- 市民、企業、社会、エリアの各ステージを超えた課題解決連携ネットワーク

概念の定義とビジョンの言語化

- ネタの共有に加えてビジョンの共有・共創
- その次の価値観を育てる場
- 教育インフラとしての大学を再定義する
- 学び続けることを改めて問い直したい
- 「サミット」というネーミングあってる？考えたい
- リカレント教育の定義の言語化、意義
- 「リカレントとは？」の言語化をじっくり時間をかけてつむぐ
- 前向き、人生を楽しむためのリカレント教育の発道者でいよう

大学間・組織間連携の具体化

- 小樽商科大 MBAエッセンシャルズ+各大学のリカレントプログラム、一緒にどうですか？
- 講師人材の共有
- 共通の社会課題をテーマとしてプログラムを紹介し合う(または参加し合う)
- 越境、中四国のリカレント
- 情報発信のために関与している人たちの努力の元、AIも活用して何かできそう・・・

現場視察と多角的視点の取り込み

- 別視点から見た「リカレント」を一緒に学ばせていただく(地域、自治体、民間、個人から)
- 北大版SDGsマイスター(One Healthマイスター)を妄想したいので金沢に行ってみたい
- 各地の受講生の学びの成果の共有(何に価値を感じたか)
- お互いの現地、現場に行かせていただく
- 各現場に必ず1回は視察に行く
- 対象を「世界」にして一緒に学ばせていただく(リカレント・・・)

5.ワークショップ内の対話 /グラフィック

課題感

意義・定義・問い

体制・実装

今後の議論につながる要素

グラフィック原本:

https://drive.google.com/drive/folders/1_Nl_Ao9gRKG3RwIbGDkQDnMzETxsUEYm?usp=drive_link

セッション3 オープニング / グランドルール

ワークショップ



種村剛弘
北海道大学大学院
教育推進機構
地域連携推進部
特任教授

名刺交換
いい感じに
あったまってきた

全国の
お菓子も
集まほす

お互いの
リカレント教育
地域の中で

可視化

現在地は?

共有に
かかろう

一緒につくりいきましょう!

おもしろ
がっつり

見せて
いく!

私たちは研究者
だからたくさん

話せるはず!

私たちの
地域リカレント
できること めざすこと

©TAGAYASU Inc. 2026

こんなふうにすま
せんか?



全ては、
正しい、ただし一部として

地域共創型プログラムの現在地 互いの考えの深堀り

組織内浸透の現状と方法

組織内、他の教員の巻き込みに課題がある

リカレントの本質、ビジョンが組織内で伝わっていないのではないかな？

リカレントを広げていくために、情報発信が必要だが、どうい手段で伝えるか？ 市民だより、メディア、ロコミなど...

リカレントは、社会を更新していく装置になる！！

組織としての姿勢

そのためには組織としてリカレントにどのくらい重きを置くか 考える必要がある

リカレントの地位向上し、自走していくためにはリカレントの単語や意義を多くの人が知らないといけない。

そもそも、大学の教育に「社会貢献」が加わったことを教員が理解していない。理解を広げる必要がある

金銭面で文科省への依存をやめるために



リカレントの目線は、個人、企業、社会で異なるのではないかな？

リカレントの位置づけ
視点、視座
大学の可能性

学び続けることは必要だが企業は疲弊している、マインドチェンジが必要。

そのマインドチェンジの担い手になれるのは大学

学び続けるために、対話が生まれることでイノベーションが生まれる

研究者は没頭する特質があり良い悪いではなく話せない人が多いのでは？

デュアルティーチングで、研究者の横に翻訳できる人、解説する人が立って「この研究はこう社会で使えるんです」と伝えられると受け取りやすいのではないかな？

リカレントと地域創生を切り分けるのか、整理が必要

今はどうしてやっているのか一人が関係者みんなに伝えている現状。(分野を越えて) 通訳は必要

組織内の連携・役割分担

リカレントの本質

リカレントの本質って？

「リカレント」現在はカメレオンのように
使われる言葉
カオスの中から大事なものをつくっ
ていく過渡期にいるのではないかな

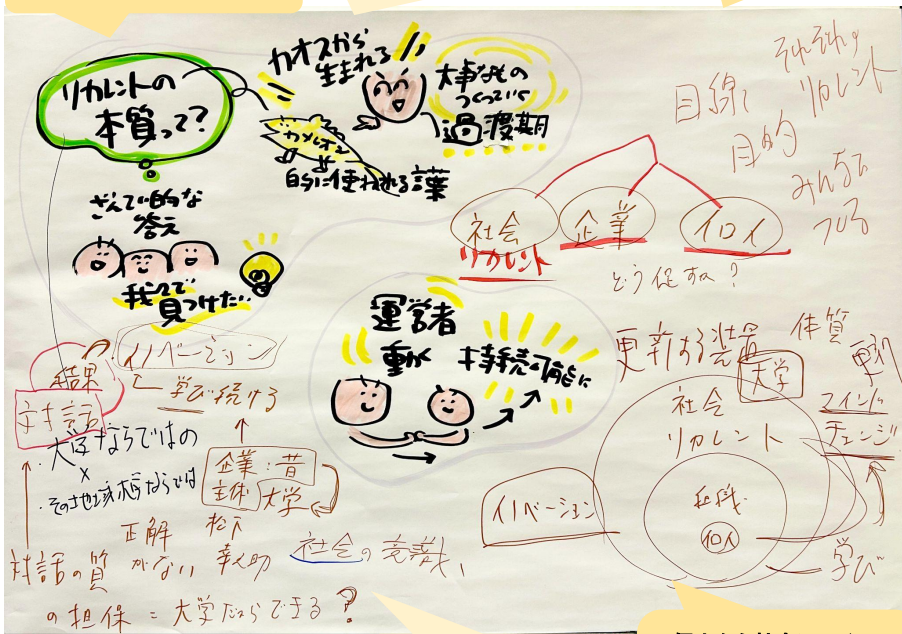
社会、企業、個人それぞれの
リカレントの目線や目的

大学だから
できること

大学は利害関係に囚われないからハブになれる
どう大学を捉えるのか？

- ・アカデミア=こわいイメージ
- ・壁がある

- ・偉そうな人も多い→まずは心構えのレクチャーから！
- ・シニア層へのアプローチ



- ・対話の結果イノベーション、学び続ける
- ・対話の質の担保＝大学だからできる？
- ・大学ならではの ×その地方大学ならではの

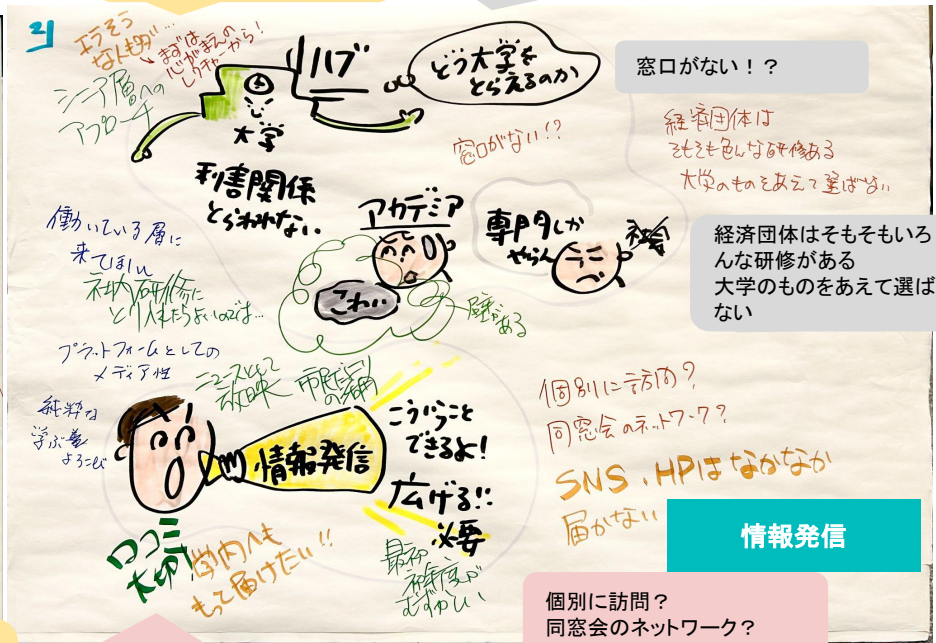
- ・企業:昔主体→大学
- ・松下幸之助
- ・社会の意識

大学だから
できること

- ・個人から社会にマインドチェンジ
- ・更新する装置
- ・イノベーション

大学だから
できること

純粋な学ぶ喜び



情報発信
 こういふことできるよ！と広げる必要

口コミ大切！学内へももっと届けたい

ほしい プラットフォー

働いている層に来てほしい
社内研修に取り入れたらよいのでは・・・

プラットフォームとしてのメディア性
ニュースとして放映
市民だよりの活用

SNS・HPはなかなか届かない・・・

最初の初年度がむずかしい

学びの内容・スキル

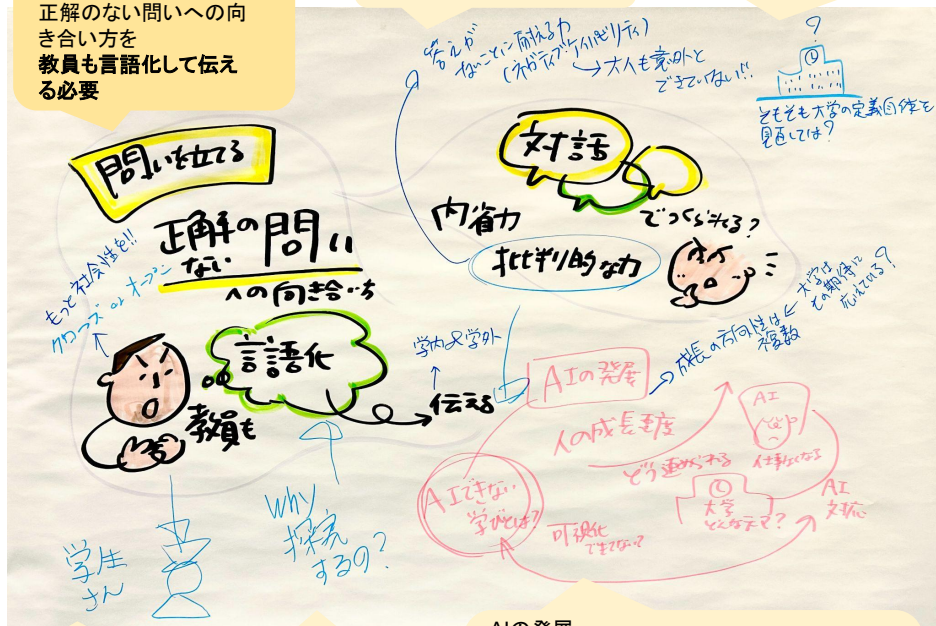
伝える
校内・学外

問いを立てる
正解のない問いへの向き合い方を
教員も言語化して伝える必要

答えがないことに耐える力（ネガティブ・ケイパビリティ）大人も意外とできていない！！

内省力や批判的な力は
対話でつくられる？

そもそも大学の定義自体を見直しては？



教員
もっと社会性を！！
クローズ or オープン

why
探究するの？

AIの発展
AIができない学びとは？ ↔ AI対応の学び
可視化できていない？
人の成長速度はどう進められる？
→ 成長の方向性は複数
→ 大学はどの期待に答えている？

プログラムの方針

戦略的に何を推すのか？

ニーズが先？ シーズが先？



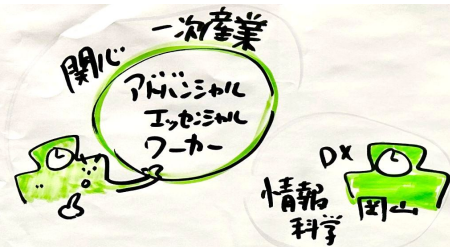
ターゲット
企業 or 個人
(自走かも考えて)

魅力的な教員はひっぱりだこ
インセンティブをどうするか

プログラムの方針

関心は一次産業に
アドバンシャルエッセンシャル
ワーカーの可能性

「急ぐな休むな」→ゆっくり学べ
新渡戸稲造



スキル 専門性

ツールの使い方を学ぶだけで
いいのか？

ツールの使い方
を学ぶだけ...の？

各組織内の仕組み

市役所内で仲間をつくる必要

ちょこっという仲間
担当の魅力たまたま



ちょこっという仲間
担当の魅力たまたま

受講生を送り出す
経営者が価値を感じていない

アップデートされてない！
できているかどうか企業によって

差がある

実態を知らずに仕事をしている
職員

受講生を送り出す
経営者が価値を感じていない
→アップデートされてない！
→できているかどうか企業によって
差がある

経営者・管理職向けのセミナー
・勉強会の機会

リカレントの方向性

組織ごとのリカレントの位置づけは？
そこから道人材を育てられるのか

大学内の連携

社会人向け手に放しながらない
教員もいる

コミュニケーションして
いない

運用のための制度

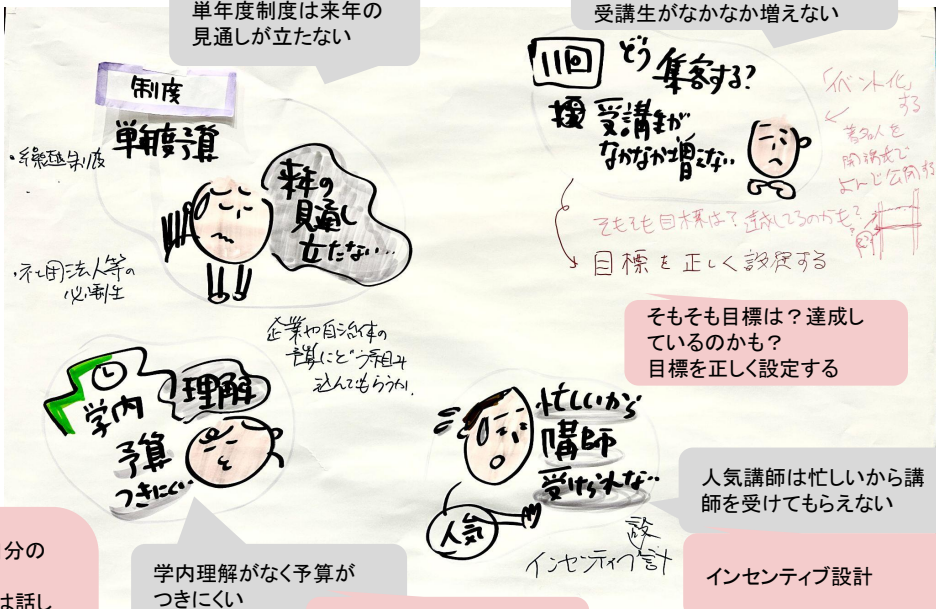
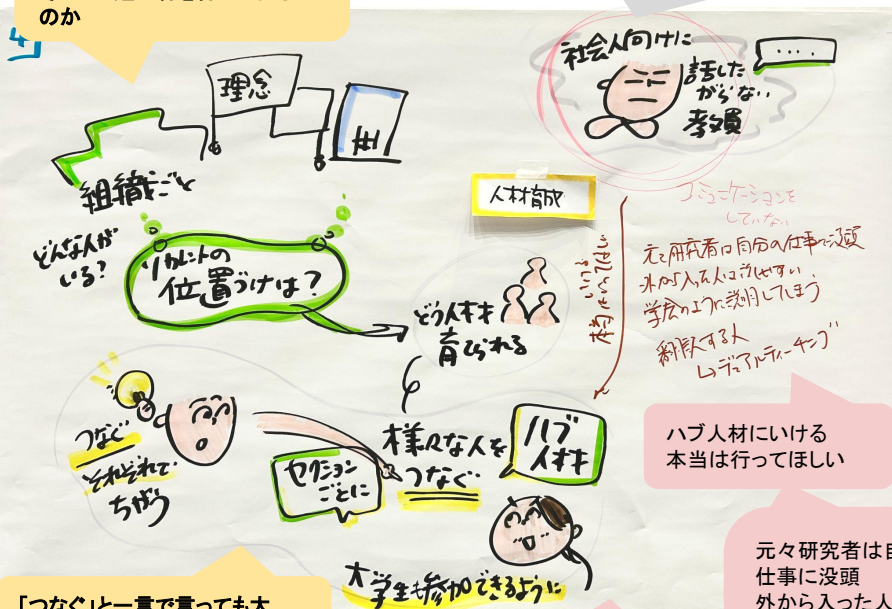
- ・繰り越し制度
- ・社用法人等の必要性

単年度制度は来年の
見通しが立たない

プログラムの運用

「イベント化」する
著名人を関係性でよんで公開する

11回のプログラム
どう集客するか？
受講生がなかなか増えない



ターゲット

大学生も参加できるようにした
事例

元々研究者は自分の
仕事に没頭
外から入った人は話し
やすい
学会のように説明して
しまう

翻訳する人
デュアルティーチング

学内理解がなく予算が
つきにくい

企業や自治体の予算にど
う組み込んでもらうか

講師の見つけ方

人気講師は忙しいから講
師を受けてもらえない

インセンティブ設計

講師のを見つけ方

講師の発掘は
メリットを先に見せる
修了生や地域内からも講師を探し
ていいのではないか

組織内の体制

”兼務”は”ハブ人材”では？
良いことばかりじゃないよね・・・

複数兼務していて
リカレントだけ取り組むのは難し
い

「兼弱」は「ハズレ材」では？
よいことはやりだすよいね...

兼務
リカレント
たがは
あずかい

(に)かゝ一度やれ!
 やればわかる!!

マインドセットと体制

とにかく一度やれ！
やればわかる！！

リカレントに取り組むには熱い
心が必要

あつい心があるうちに何とか制度・身分を整えろよ...

1番大事！どうしたらつながれる？火を付けられる？

部局だけで動いている。
教員との意識差
教員の関りが少ない
教員の協力

講師の見つけ方

本当にインセンティブだけ？

教員の評価があるわけではないし、単価も少ないと講師はやる気がでない

教員がリカレントに非協力的なのは社会人相手に授業することに対して慣れていないので避けているのでは？

教員からレントに非難がある
 には、社会人相手に授業する
 ことに對して寛大でないとい
 へるのでは？

2 自主化工作
手机是物

構造問題

プログラムの運用

オンデマンドはフィードバック
があると受けている実感につ
ながりやすい

単価
持続できるのか？

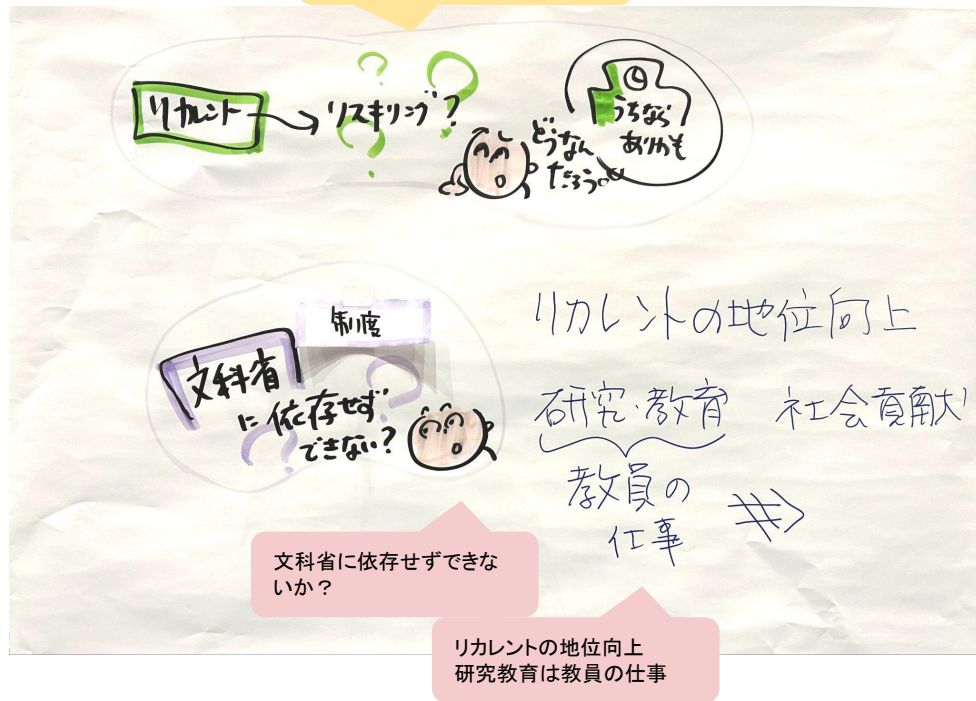
価格

オンデマンドはコストかかるし対面のみは受けが悪い。オンラインで実施して年1対面の事例

自走したくても手かせ足かせ
学内制度的に問題

リカレントの位置づけ

リカレントはリスキリングになっ
てきた？
大学ごとに違う？



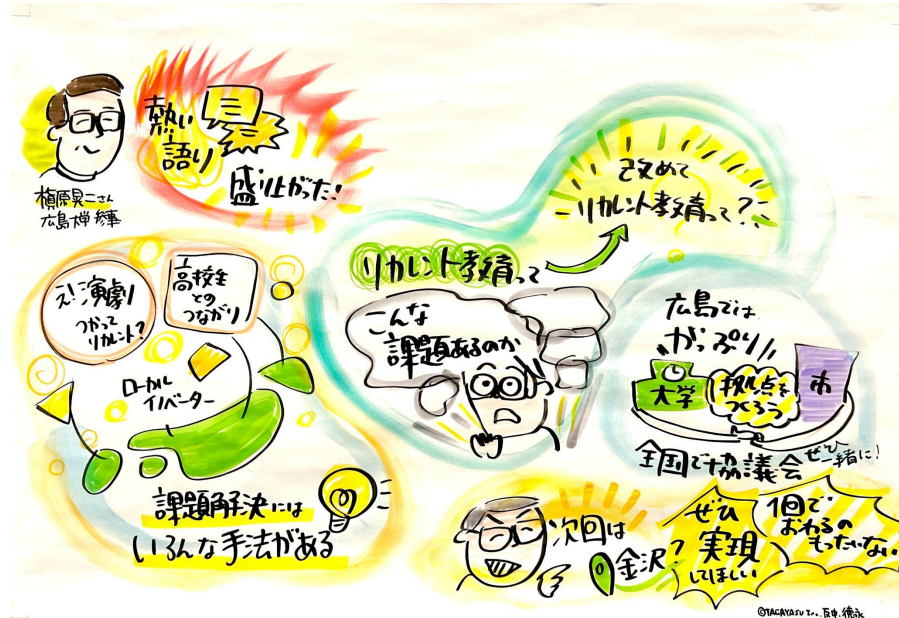
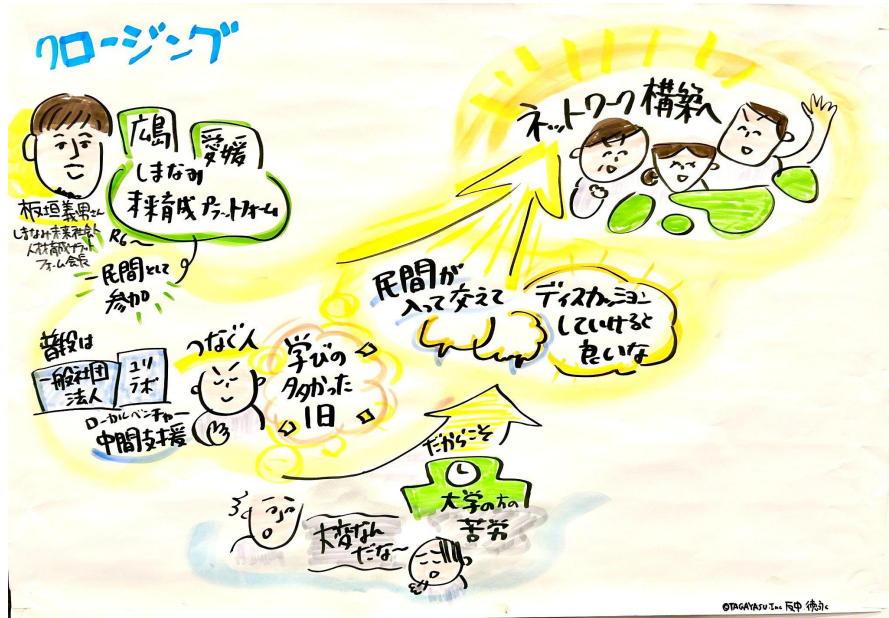


閉会の挨拶: 板垣義男 しまなみ未来社会人材育成プラットフォーム会長



閉会の挨拶: 榎原晃二 広島大学参事

閉会挨拶



今回の閉会挨拶では、大学内・大学間、さらには民間も含めた新たなネットワーク構築の可能性が語られ、各地域が持つ特性を生かした多様な手法や知見を共有し合えた意義が改めて確認された。また、議論を通じて現場が抱える課題の実態を再認識し、そこからリカレント教育をどのように構築していくかについても、今後の検討余地が示された。

今回限りではなく、次回以降もサミットを継続的に実現し、ネットワーク形成をさらに前へ進めていく前向きな期待をもって締めくくられた。

6.参考/打ち合わせ記録

<川本さん、種村さんより>

- 人口減少への課題感につながっているのではない。
地方創生にちゃんと向き合おうとしているのか。向き合おうとすると必ず人口減少の話がされる。
そこにはいろんなグラデーションがある。重みがあって違いがある
- 地方の他大学は、人材を育成するためにやっていかないといけない(学術、教養、スキル)
- 北大は人口減少への危機感ない。「地方創生どうなの？それよりもな。」という心持ちかもしれない
ex. 小樽商大進学率低いことをどうにかしたい
- 地方だと自治体と企業が密。ハブ人材として大学の役割。
自分たちのやっていることへ問いかける
今回、想定していたより参加者の幅が広い

どんな切り口でより残したい？
「違い(都市と地方、事業、育てる人材像、習得するスキル)」「共通点(〃)」「学術的視点(大学だからこそのやる意味?)」
「ステークホルダーとの関わり」「温度感」「ステークホルダーの考え」

・地域 — 企業
・学術 — 実践
・人 — 人材
人口減少への課題感 地方創生

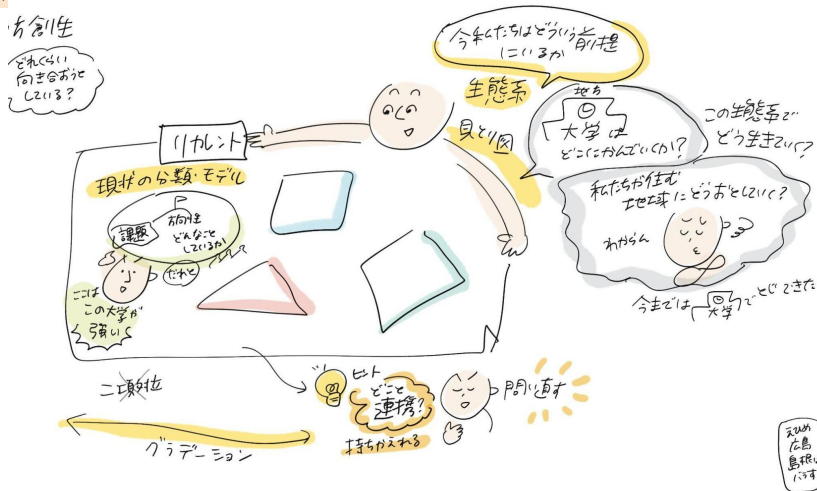
<最終アウトカムのイメージ>

- リカレントのモデルができるといい(多様、見取り図のような)
大きな、そこにどういう課題があってどんなことをしていて、メリット。ここは現状の話から立ち上がる

- 地域に対してどうはまっていくなかに悩んでいるはず
大学が地域の生態系の中に入っていくとしたらどう入れるのか

<アウトプット>

- まずはリカレントとはどのような生態系なのか描かれる
- 大学の主体がその生態系にどのようにかんでいくのか
(かんでいきたいかが話し始められる)



・今後の予定

明日、報告を広島大、愛媛大、島根大の方々と振り返る予定

- サミットの報告、10名程度の民間・はじめてのかたも含めてディスカッションする前段としてお伝えする
- 北大リカレント他大学との関心・連携からサミットを実施
- 全員参加、凝った構成にしない、やっておわりにしないなど事前に据えていた観点でふりかえる予定。

・当日の運営体制のヒント

- ・盛り上げてもらえた、ファシリがもう一人入ってやること意義があるんだろうなと感じた。ファシリの専門家が入るといいことあるよ、と展開できたらいいのだろうな。
- ファシリから提案がある。頭が二つある、フォローしてもらい、協働作業ができたことが大事に思った。グラフィックの専門性をもっている、種村さんは司会進行のスキルがある、組み合わせたことでより良いものができたと感じた。司会進行は具体的に手が回らなくなる。司会は全体、グラフィックは具体、分業体制ができていることがよかった。分業していればいいのかという協働作業ではない。コミュニケーションの場をとって認識のすり合わせをしてストーリーを事前に決まって流れが見えていることで安心してできた。事前にストーリーラインをお互いに共有することができた事は重要だったかな。当日よりいどんでは雑になる。そうじゃない形で実感できた。

・可視化の当日と事後の活用

- ・当日の可視化の目的、終わった後の可視化の目的が違う。当日は安心して話す、話したことが重なる。後日は事実を曲げずに特に伝えたいことを伝えるようにする

・当日、収穫できたこと

- ・目指す姿をまとめる前までがゴールだったリカレントを明らかにすることの必要性が話されたことが良かった、リカレント教育は何なのか、の何ためのリカレント教育？何のための手段になっていくのか話されてよかった
 - ・地方創生や衰退していく地域に対して、リカレント教育が何ができるのか考えていく事が、それぞれの思いとしてあったと感じている。
 - ・地域に貢献するための手段としてよくなっていくためには企業、ほかの地域のネットワークが重要といえたのかな
 - ・どう思いを伝えていって、お互いの理解を深めていけるのかより重要になってくるのかな、と改めて感じている。
 - ・情報のリッチなやり取りがなされたことがグラフィックも活かされていた
 - ・ビジョンがいまはふわっとしてる話のため、むしろ具体のビジョンをきちんと話し合わないといけないよねという転換にしたい
 - ・クロージングのお話のように、ネットワーク構築、想定しているのは大学のネットワークを具体のビジョンを立てられればいいな思っている。そのために継続して続けていく、活動は事実、活動を続けていくことでネットワークができていと思う。
- じゃあ次誰が何をやるのかきっちり決める。手段としてサミットをして、ノウハウをつかんでいく、形式的に見せ方をしても進まなくなっているから、実質的な何かをやるならやると示せたらいいんじゃないか。
- 次の主幹校をきめる。みんなでやるということなのかな。
- クロージングのイラストもつかって、語っていただく。ストーリーで相手に伝えることがグラフィックの強み。貼り付けて使えそうであればつかってほしい。
 - グラフィックがストーリーなんだ、ストーリーを1枚で時間をかけずに共有できることができる
 - 文字にするといいことだけがグラフィックになりがちだが、グラフィックはいいとこばかりだけでなくネガティブなことな話もそのまま残すことがしやすくなる。

開催をふりかえる

結果

- ・ 想定より関心がかなり高かった
- ・ 実務経験がある層を想定していたが、初期層も少なくなかった
- ・ 大学により組織体制が異なり「リカレント」の幅がかなり広がった

考察

- ・ 定期的な交流は相互にとってメリット
- ・ 一部のオンライン配信や、プログラム参観・プログラムモデル作成といった実践的サミットも考えられる
- ・ 地方私立大学や修了生への拡大？
- ・ 議論をどのように省庁や産業界へインプットしていくか？

運営について

- ・ 2校による運営は負担軽減として妥当
 - ・ 講師招聘・旅費等支給＝しまなみPF
 - ・ 会場・当日運営・記録等＝北大
- ・ ただし細かい事前調整を要する
- ・ 低予算での設計も必要
 - ・ 多人数・凝った企画にすると予算的にも人的にも高負担になり引受校がなくなる
- ・ 実施時期は要検討
 - ・ 年度後半は参加しやすいかもしれないが、地域によって天候のリスクがある
 - ・ 単年度予算の場合どうしても年度末になってしまうか

も